

附属特別支援学校教育実習における観察実習・プレ実習が及ぼす 教育実習及び教職実践演習への効果

◎奥住秀之（特別支援科学講座）

○亀田隼人（附属特別支援学校）

濱田豊彦（特別支援科学講座）

山本由佳（附属特別支援学校）

代表者連絡先：okuzumi A_T u-gakugei. ac. jp

【キーワード】 特別支援学校、教育実習、観察実習、プレ実習、ポスト実習、教職実践演習

1 はじめに

教員養成系大学・学部における教育実習の意義がますます重要視されている。平成18年7月の中央教育審議会答申『今後の教員養成・免許制度の在り方について』において、「教育実習は、学校現場での教育実践を通じて、学生自らが教職への適性や進路を考える貴重な機会であり、今後とも大きな役割が期待される」「大学は、教科に関する科目の担当教員と教職に関する科目の担当教員が共同して、教育実習の全般にわたり、学校や教育委員会と連携しながら、責任を持って指導に当たることが重要である」など、教員養成における体系的な教育実習の重要性やその充実が指摘されている。

東京学芸大学附属特別支援学校は、学部生の特別支援学校教育実習を行っているが、そこでは実習の前に観察実習とプレ実習を、実習後にポスト実習を企画し、実施している。観察実習は4年次の4、5月に実施しており、実習生が附属特別支援学校の幼稚部、小学部、中学部、高等部の授業を、平均3日間程度参観するものである。プレ実習は4年次の6、7月に実施しており、学部・学年に配属された実習生が、附属特別支援学校の指導教員のもと、学級や学習グループに入り、半日から1日程度の授業補助を複数回経験するものである。ポスト実習は9月の教育実習終了後に実施しており、学校を訪問し、幼児児童生徒の成長発達を観察し、授業補助を行うものである。こうした取り組みは、学生の教職に対する使命感や責任感、教育愛情等を深め、教育実習の学びをより深めるものになっていると考えている（亀田ら，2012；亀田ら，2013；奥住ら，2009）。今回のこのプロジェクト研究は、この観察実習、プレ実習、ポスト実習に関する調査と改善の方向性に関するものである。

2 本プロジェクトの目的

本研究では3つの検討を行った。検討1は、全国の教員養成系大学・学部に設置されている附属特別支援学校において、観察実習・プレ実習、ポスト実習のような取り組みがなされているのか、それは効果があるとみなされているのかという現状の調査である。検討2は、本学の特別支援教育専攻の学生（実習生）が、観察実習・プレ実習、ポスト実習をどのように感じているかについての資料である。検討3は、観察実習・プレ実習が、教師になるための到達目標にどの程度関係するかについて、特別支援教育教員養成課程実習生に対して、中央教育審議会答申『今後の教員養成・免許制度の在り方について』にある「教職実践演習」の12種の到達目標のそれぞれについて、本番の教育実習に向けて、意欲・知識・技能等の形成につながる学習や経験を観察実習・プレ実習でできたかの検討である。

3 本プロジェクトの実施

3-1 教員養成系大学・学部附属特別支援学校教育実習における観察・プレ・ポスト実習の現状

(1) 目的

全国の教員養成系大学・学部附属特別支援学校における観察実習・プレ実習、ポスト実習の現状について調査する。

(2) 調査対象・方法

本学を除く附属特別支援学校 44 校に調査用紙を郵送し、38 校から回答を得た。回収率 86.3%であった。調査時期は 2013 年 11 月～12 月である。

(3) 結果と考察

観察実習・プレ実習については、何らかの形で行っている学校は 32 校で全体の約 85%と多く、また、選択実習は必修実習ほど実施されていなかった。観察実習・プレ実習が「とても有効」と回答する学校は 8 割以上で、観察実習・プレ実習が有効でないと回答する学校は 1 校もなかった。観察実習・プレ実習の内容は、授業参観・観察、授業参加、講義・講習などに整理された。実習前に実施しているその他の取り組みについての自由記述については、講義、オリエンテーションなど、観察実習・プレ実習に含められると思われる取り組みが多かった。まとめると、観察実習・プレ実習については、かなり多くの学校が実施しており、その教育的意義も高いとみなされている。その内容をみると、授業観察、授業参観、講義などの観察的なものが中心である一方で、実践参加型のプレ実習を行う学校も見られており、今後の観察実習・プレ実習の内容として注目される。

ポスト実習については、何らかの形で行っている学校は 9 校で全体の約 25%程度にとどまり、観察実習・プレ実習と比較して数は少なかった。観察実習・プレ実習が「とても有効」と回答する学校は 3 割強にとどまり、ここも観察実習・プレ実習と比較して低い値であった。しかし、有効ではないと回答する学校は 1 校もなかった。ポスト実習の内容は、振り返り・反省会・討議、ボランティア、事後観察、事後レポートなどに整理された。実習後に実施しているその他の取り組みについての自由記述については、ボランティア、レポートなど、ポスト実習に含められると思われる取り組みが多かった。まとめると、ポスト実習については、実施校は観察実習・プレ実習と比べると少なく、教育的意義も評価されてはいるが、観察実習・プレ実習と比較すると高くない。その内容をみると、振り返り、反省会、レポートといった「座学」が中心である一方で、一部の学校で「ボランティア」（おそらくは授業補助等の役割を与えるなど）など実践参加型のポスト実習がなされており、今後のポスト実習の内容として注目される。

3-2 東京学芸大学附属特別支援学校教育実習におけるプレ実習とポスト実習の効果

(1) 目的

本学の特別支援教育専攻の学生（実習生）が、観察実習・プレ実習、ポスト実習をどのように感じているかについて明らかにする。

(2) 調査対象・方法

附属特別支援学校で教育実習を実施した学生に対して、観察実習・プレ実習、ポスト実習の参加や満足度について尋ねた。回収率は、平成 24 年度は必修実習 85%、選択実習 100%、平成 25 年度は必修実習 100%であった。また教育実習担当教員に対して、プレ実習の内容に関するインタビュー調査を行った。

(3) 結果と考察

プレ実習における学生の参加日数については、2年間で多少の差異があるものの、必修実習では3日、4日が最も多かった。選択実習では1日、3日の参加が多かった。教員への調査では、学生ができるだけ多くプレ実習に参加してほしいという意見がほとんどであった。プレ実習での指導内容は学部ごとに異なるが、子どもとのラポートを形成すること、実態把握をはじめとした本実習で行う研究授業に向けた具体的な準備するという目的は共通し、担当の幼児、児童、生徒とどれだけ長い時間関わるかがポイントの一つになるという意見が多かった。

プレ実習「満足感」については、全ての学生がプレ実習の実施に肯定的な評価であり、意義や目的を理解して取り組む姿勢を伺うことができた。また、観察実習で学べなかったことを、プレ実習で補う様子をみてとることもできた。各学部のプレ実習における実際の指導内容としては、サブティーチャーとして授業に参加したり、幼児、児童、生徒を個別に担当して部分的に関わったり、期間中に開催される行事の手伝いをとおして学級もしくは学部全体の雰囲気や様子を把握するものや、本実習中に学生が行う研究授業の教科等を指導教員が示範することで、自らが行う授業に対する具体的なイメージをもたせるものなど様々である。実態把握のポイントを明示し、次の来校までに整理させる指導を行う場合もある。学生がプレ実習に明確な目的をもって取り組むことができるような目的の事前周知や指導計画の整理は大きな課題である。

ポスト実習の指導では、行事等の手伝い、授業参加、研究授業改善などである。参加した学生の満足度は高かった。しかしその参加人数は少なく、その増加が今後の課題であることが改めて示された。

3-3 東京学芸大学附属特別支援学校の教育実習におけるプレ実習で得た教員の力量

(1) 目的

観察実習・プレ実習が、教師になるための到達目標にどの程度関係するかについて、特別支援教育教員養成課程実習生に対して、中央教育審議会答申『今後の教員養成・免許制度の在り方について』にある「教職実践演習」の12種の到達目標のそれぞれについて、本番の教育実習に向けて、意欲・知識・技能等の形成につながる学習や経験を観察実習・プレ実習でできたか検討する。

(2) 調査対象・方法

25年度の9月に附属特別支援学校で教育実習（必修）を行った学部4年生24名を対象とし、全員より回答を得た。調査時期は2014年2月である。

調査の内容は、中教審答申『今後の教員養成・免許制度の在り方について』にある「教職実践演習」の12種の到達目標について観察実習・プレ実習で、意欲・知識・技能等の形成につながる学習や経験ができたか（プレ実習だけでその力量を形成できたではない）4段階評定。とてもできた（4点）、ややできた（3点）、あまりできなかった（2点）、まったくできなかった（1点）。12項目は次のとおり。

- 1 教育に対する使命感や情熱を持ち、常に子どもから学び、共に成長しようとする姿勢を身に付ける。
- 2 高い倫理観と規範意識、困難に立ち向かう強い意志を持ち、自己の職責を果たす。
- 3 子どもの成長や安全、健康を第一に考え、適切に行動する。
- 4 教員としての職責や義務の自覚に基づき、目的や状況に応じた適切な言動をとる。
- 5 組織の一員としての自覚を持ち、他の教職員と協力して職務を遂行する。
- 6 保護者や地域の関係者と良好な人間関係を築く。

- 7 子どもに対して公平かつ受容的な態度で接し、豊かな人間的交流を行う。
- 8 子どもの発達や心身の状況に応じて、抱える課題を理解し、適切な指導を行う。
- 9 子どもとの間に信頼関係を築き、学級集団を把握して、規律ある学級経営を行う。
- 10 教科書の内容を理解しているなど、学習指導の基本的事項(教科等の知識や技能など)を身に付ける。
- 11 板書、話し方、表情など授業を行う上での基本的な表現力を身に付ける。
- 12 子どもの反応や学習の定着状況に応じて、授業計画や学習形態等を工夫する。

(3) 結果と考察

「とてもできた」の回答者が多い項目は、7、3、1であった。教育実習の基本となる幼児児童生徒とのかかわりの姿勢や子ども観や子ども理解などを観察実習・プレ実習で学んでいることがわかる。

一方、「あまりできなかった」「まったくできなかった」が多い項目は、6、10であった。保護者や地域という視点をどこまでどのように養成段階で高めるのかは検討課題である。また、知的障害特別支援学校ゆえ準ずる教育課程が存在しないことの影響をどう工夫するかが課題である。

項目全体として評価は高い傾向にあり、観察実習・プレ実習が幅広い側面で学生の学びに有効であったと判断される。

4 まとめ(成果・課題)

教育実習に向けた観察実習・プレ実習については、比較的多くの附属特別支援学校が取り組んでおり、その効果も高いとみなされている一方で、実習後に行われるポスト実習は取り組む学校も少なく、内容も検討段階にある。

本学附属特別支援学校においても、観察実習・プレ実習は学生の参加も多く、効果も高いと評価されている。一方で、ポスト実習は効果が高いと推測されながらも、学生のスケジュール、大学と学校の物理的距離などの問題から参加者が少ない。教職実践演習と関連させたポスト実習の検討が必要と考えられる。

観察実習・プレ実習で学べる内容については、幼児児童生徒とのかかわりの姿勢や子ども観や子ども理解などがまず挙げられ、これは実習でまず重要となる力量である。一方、保護者や地域という視点をどこまでどのように養成段階で高めるのか、知的障害特別支援学校ゆえ準ずる教育課程が存在しないことの影響をどう工夫するかは、教育実習全般を通じた課題であると考えられ、これも教職実践演習との関連で検討する必要がある。

5 引用文献

- 1) 亀田隼人・松本直巳・蓮香美園・山本由佳・奥住秀之(2013)教育実習の充実に向けた取り組み, 東京学芸大学附属特別支援学校研究紀要, 57, 123-126
- 2) 亀田隼人・山本由佳・奥住秀之(2012)教育実習の充実に向けた取り組み, 東京学芸大学附属特別支援学校研究紀要, 56, 177-180
- 3) 奥住秀之・根岸由香・高野裕美(2009)附属特別支援学校での観察実習・プレ実習を通しての教職実践力育成の試み, 東京学芸大学紀要総合教育科学系, 60, 225-229